

ソジニーと資格(意識)、黒人社会と家父長制的規範を読む三冊

周縁化されたセクシュアリティから撃て!

しかし、どんな社会を?

福永玄弥

本書は、1990年代以降に展開する性的マイノリティの社会運動を対象に、マイノリティの当事者戦略に焦点を当てて考察を試みた博士論文

ある。

本書は、1990年代以降に展開する性的マイノリティの社会運動を対象に、マイノリティの当事者戦略に焦点を当てて考察を試みた博士論文

ある。

2023年6月17日、韓国大邱市で開催された性的マイノリティのプライド・パレードで事件が起きた。保守政党「国民の力」所属の首長が「行政代執行」を命じ、大邱市の公務員を率いてパレード会場を撤去しようと妨害工作を試みたのである。これに対してパレードを保護するため動いたのが警察である。最終的に行政が身を引いたことでパレードは予定どおり開催されたが、歴史的に性的マイノリティを弾圧してきた警察が、公権力を乱用してパレードの妨害を試みた行政を牽制したのは興味深く、時代の変化を象徴するようである。ただし、今年に入ってソウル市もプライドパレードに対してソウル市庁前広場の使用を不許可とする政治的介入を行い、仁川市も女性映画祭の上映作品からクィア映画を外すよう要求するなど、性的マイノリティに対するバックラッシュの激しさと高まりは日本だけでなく韓国でも顕著である。

を元としている。1990年代に英語圏で展開したクィア・スタディーズは韓国のアカデミアにも影響を与え、周縁化されたセクシュアリティというボジションから性的マイノリティの抹消された歴史を「発見」し、異性愛規範への批判的介入を試みってきた。本書はこれらの豊かな先行研究を丁寧にレビューしつつ、1970年代以降の韓国社会で性的マイノリティがどのようなコミュニティを形成し、社会を変革するための運動に参加してきたかを明らかにしている。

興味深いのは、性的マイノリティの中でもレスビアン女性とゲイ男性が1970年代には異なる「コミュニティ」を形成し、社会を変革するための運動に参加してきたという事実である。「LGBTQ」や「性的マイノリティ」といったアンブレラ・ターム(包括的なカテゴリー)が主流となった今では想像しづらいかもしれないが、性的マイノリティとして人権や権利を主張する社会運動が1990年代に台頭するまで、レスビアンとゲイの間に共有される利害は少なかった。中でも、1970年代に結成された「女連会」(会員の多くがタクシー運転手だ

た)というレスビアンコミュニティに何千人もの女性たちが全国から集まっていたという事実は興味深く、さらなる研究が待たれる。1990年代に社会運動が展開した後も、ジェンダーという点でマジョリティであるゲイ男性とマイノリティのレスビアン女性との間の権力関係がときに「同性愛者」という集合的アイデンティティよりも前景化され、運動が分裂したネガティブな経験に関する言及も見られる。

韓国では2010年代に「フェミニズム・リフト(再起動)」と呼ばれる社会現象が起きて、フェミニズムに関するエッセイや文学が相次いでベストセラーとなった。日本でも『82年生まれ、キム・ジヨン』(筑摩書房)を皮切りに韓国フェミニズム本の翻訳が続いている。ただし『根のないフェミニズム』や『薔薇はいいから議席をくれよ』(いずれもアジユマブックス)といった、トランスジェンダー女性に対する差別を隠さない「フェミニズム」本の翻訳が相次ぐ中、ほとんど類書のない韓国の性的マイノリティの社会運動に関する専門書が日本語で出版される意義は大きい。

とはいえ本書には課題もある。本書が対象とする「セクシュアル・マイノリティ運動」だが、「LGBT」に限定的な定義と明言しているにもかかわらず(16頁)、論じられる「セクシュアル・マイノリティ運動」は圧倒的に「同性愛者の運動」でしかない。「セクシュアル・マイノリティ」というアンブレラ・タームを用いるならば、著者がそれをとおして周縁化され

たのような「セクシュアリティ」に焦点を当てるのかといった姿勢については貫徹されて然るべきである。

また、周縁化されたセクシュアリティというボジションから社会を批判するとき、いかなる社会が描かれているかというと、本書を通読しても読者には臆げな「社会」しか見えてこない。セクシュアル・マイノリティの社会運動に着目するならば、それが異議を申し立て、交渉し、抵抗し、変革を希求する「社会」を明らかにしなければ議論は不十分である。たとえば本書には軍事政権に関する言及が見られる。軍事主義やその象徴としての男子徴兵制が女性を「二級市民」と位置づけるだけでなく、男性を優位とする社会構造をジェンダー化したきたことは周知のとおりだが、このようなジェンダーの政治と性的マイノリティに対する抑圧ほどのように交差するのか。あるいは開発独裁体制から新自由主義へといった政治経済秩序の再編成が、性的マイノリティの人権や権利、さらにはそれをめぐる人びとの想像力をいかに再構成してきたのか。そして宗教右派がトランスナショナルに展開している「反ジェンダー運動」(バックラッシュ)と、韓国国内で起きている性的マイノリティに対する弾圧はどのような関係を切り結んでいるのだろうか。

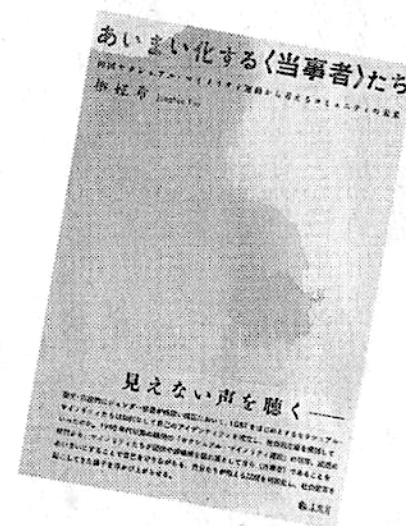
柳姫希 著

▶ あいまい化する〈当事者〉たち

韓国セクシュアル・マイノリティ運動から考えるコミュニティの未来

3・10刊 A5判204頁 本体3500円

春風社



「見えない声を聴く」